

エクセル超活用「VRX」

VRX(Virtual Reality Excel=仮想現実エクセル)テクノロジーとは、マイクロソフト社のエクセルを仮想現実的に活用して、パソコンをロボットに変身させ、エクセル作業を自動化する技術をいう。

ここでのロボットとは、エクセル作業を人間に変わり①効率よく、②スピーディに、かつ③美しく高品位に処理するソフト+ハードな物体で、特に犬型とか人間型とか動作をするものではない。大事な点は「人間が実際やっていること」との比較であるから、ロボットが学習するのは「人間がエクセルで仕事をしている」そのものである。

なぜ、いまエクセル作業が問題なのか？

それはオフィス業務の多大な部分にエクセルが使われている今日、様々な問題点が浮かび上がり、言うところの「働き方改革」に支障をきたしているからである。その背景には

① IT化の進行によりエクセルの外にも多種多様なアプリケーション(応用技術)が生まれ、それらとの連携も必要になってきていること。

② エクセル自体の構造的問題としてマクロ(VBA)が備わっていないながら多くのユーザーが活用できておらず、自己努力ではこれ以上の成果に期待が持てないこと。

③ エクセルを使える人の割合は依然低く、使っていない人をも取り込んだトータルソリューションを描かなければならない事情があること。

などがあり、ソフト界の巨人にも過去に例のない激震が起きつつある。

諸君、こんにちは

エクセルと共に生き、アプリを作り続けて 20 年

一千万人とも言われる EXCEL ユーザーが今、働き方改革の大きなブレーキになっている。もちろんユーザーでない人々も・・・、ではあるが。

問題はエクセル活用が個人レベルのため、会社全体での効率化への道筋が見えないことにある。その原因の一つに上げられるのが VBA マクロの壁。十人中九人が表計算止まりの活用で甘んじている。業界筋では「脱エクセル」を提唱する声が広がってきたが、EXCEL に変わるプラットフォームはそう簡単には見つからないだろう。なにしろ誕生以来 20 数年の実績と膨大なユーザーを抱えている EXCEL であるから。

エクセル表計算には作り手の思いが眠っている

産業界全体から見ると、EXCEL 活用がもたらした知財の蓄積は無限かつ貴重であり、簡単に脱エクセルなど言いきれないものがある。つまり如何にして EXCEL 表計算上に眠る本物のノウハウを活かし、同時に表計算の弱点と欠点をなくして、自動化や効率化を進めるか？これがこれからのソリューションテーマと言って良く、古くて新しい EXCEL ビジネスの理由でもある。

知財と言えるほどの EXCEL シートには、自他ともに認める業務上のノウハウが必ず存在している。これを作り手の知恵と呼ぼう。この知恵が深く偉大であればあるほど、作り手も経営者も様々な不安に駆られよう。その悩みを忖度すれば、「作り手本人でしか使えない

事と、メンテできない事」が筆頭で、「データ連携や効率化を図りたくても、作り手自身を取り組んでくれない限り無理」、と諦めが続く。ここから脱エクセル論が浮上するのだ。

賢明な諸君ならこう言うだろう。

「作り手の頭脳をそっくり活かして、誰もが容易にデータ連携や効率化できるロボットは作れないのか」

この切実な願いを実現するにはどんなテクノロジーが存在するのか、検証してみたい。

昨今 AI が騒がれている。単純な作業なら実用化出来ているが、無限に近い人間本来の頭脳活動の産物「Excel 知財」を人工知能にするまでにはまだ相当時間がかかると考えなければならない。

そこで EXCEL の問題を EXCEL 自身で解決する道を模索することになる。

エクセル家の矛盾と騒動が起こしたビジネス退潮の歴史

EXCEL は表計算と VBA マクロを備えた兄弟ソフトである。世に表計算だけなら過去にいくつかあったが、兄弟 EXCEL には歯が立たず、いつしか淘汰されていった。そんな強い兄弟 EXCEL にもアキレス腱があった。弟(と私は呼ぶのだが)VBA マクロがまさに「獅子身中の虫(ししんちゅうのむし)」であり、過去にたびたびウイルス騒ぎを起こしては兄・表計算を困らせてきた。

今の EXCEL になるまでに兄弟が付かず離れずの関係にさせられた長い歴史がある。詳しくは別の機会に譲るが、結果、弟・VBA マクロの力は二分されてしまった。その一つが「xlsm」で、もう一つが「xlam」である。前者は兄・表計算と弟・VBA マクロが仲良く働く条件で作られ、後者は弟だけでも働く事が許されているパワーユーザー向け自己責任の世界である。

どちらかという EXCEL の生みの親のマイクロソフトは前者を推奨したいだろう。しかし兄弟が揃っている時のみ弟の出番があると言うのではデータ連携などの問題解決にはあまり役に立たないことも知っているに違いない。一方後者には表計算こそないがあらゆる表計算を相手にバンバン、データ連携や自動化が出来る力がある。だが素人衆には危ないので、いわば「危険者の系譜」にされてきたのである。

結論的には、EXCEL 問題を解決したければ「有用な表計算シート + 危険者と言われている xlam」と言う組み合わせになるのだが、実はそれはあまり実用的ではない。ここから先はやってみた事のある人しか分からない世界だが、実際に使うのは生身の人間であるから、元々無理やり一緒にさせられた両者を、素人に近いユーザーが巧みに操り、常に間違いない結果を導き出すなどは元より不可能な相談なのだ。

表計算からノウハウの抽出に成功して 10 年、VRX の誕生

私が出した結論は「兄・表計算には、その役目を終えたらあとは弟・VBA マクロに任せて視界から消えてもらうしかない」というものであった。これを EXCEL 家の矛盾として自ら受け入れるまでにはかなりの年月を要したが、諸君もまた同様に理解に苦しむ事であろう。なんと言ってもあの兄弟を生んだソフト界の巨人マイクロソフトの意思に背くには相当の勇気がある。だが誰かがやるしかない。意を決して兄・表計算の頭脳を抽出し、弟・VBA マクロに移植する無慈悲な決断を下して、タブーに挑戦し始めたのである。

時を経て、兄・表計算は弟・VBA マクロに変換され、その頭脳は仮想現実の姿で残るようになった。兄・表計算はその時点で役目を終え、オリジナルが再び使われることはない。

弟・VBA マクロは兄・表計算を必要な時にいつでも再現でき、直ちに自らの力で兄の頭脳を活かした多才な処理を実行できる。

EXCEL 兄弟は誕生以来再び一つになれた。しかもこの世で最強の力を授かったの奇跡的カムバックだ。この最強の復活劇を VRX(virtual reality excel=仮想現実エクセル)と呼ぶことにしたのである。

VRX によって二つのことが可能になった。

その一つは、膨大な EXCEL 表計算ユーザーの知財をもとに自動化と効率化が図れること。もう一つはこれまで EXCEL を使わなかった人々も VRX を介して EXCEL 知財を使うことが出来ること、である。

しかしどうやって VRX を世間に普及させるかが次の課題である。

ウイルスに負けないロボットアプリをつくり世に出す決意

VRX は VBA マクロそのものである。因みに兄・表計算を弟・VBA マクロに変換したのも、実は弟・VBA マクロ自身なのである。最大の課題は、VRX を如何にウイルスから護るかである。ウイルスとは悪意あるプログラムの改ざんや進入であるから、その機会を断つことが必要である。そこで考えたのがロボット化であった。弟・VBA マクロを使ってウイルスが入り込めない母体をつくり、そこに兄・表計算から抽出したマクロコードを移植する。この作業を公開してしまえば再びウイルスの脅威にさらされるから、ロボットアプリの生産はすべて無菌室で行う。といってもきちっと管理したパソコン一台あれば良いのである。

肝心のお客様はどうするのか？ ネット社会の進行でソフト関係のビジネスは様変わりしているがもともと深い知識を要する EXCEL アプリの流通にネットは不向きであった。「新しいブ

ドウ酒は新しい革袋に」ま譬えがあるように、EXCEL 知財の流通には新しいスタイルがふさわしい。試行錯誤の結果、ロボットアプリを「市販のメモリー」に移植するアイデアを思いついた。「メモリーソフト」などの試作を経てついに手にしたのがロボットカード「ROBOCA」のスタイルである。

エクセルを使えない人も救済するロボットアプリ「ROBOCA」

VRX は EXCEL 活用の一つに過ぎず、やろうと思えば誰にでも出来るというオープンさがある。ROBOCA にしてもどこでも手に入る市販のメモリーカードである。つまりコロンブスの卵だったというわけだが、VRX がこの先の知的社会づくりに一体どれだけ貢献できるか。未来は、知識と知恵を人から人へとつなぐ諸君の手に委ねられているのだが、高齢となった私が ROBOCA の晴れ姿を見ることはないかもしれない。(2019.12.1 横山英昭筆)